ALT

こんにちは
ルーカス・クラークソン
外国語指導助手（ALT）
です

ヤンキーも大変

今月のタイトルを見て「ルーカス先生はニューヨーク・ヤンキースファンだった？確か中西部の出身だと思ったけど」と考えている人もいるのではないでしょうか。あるいは「ルーカス先生、どうして髪の毛をオレンジ色に染めて真夜中にミニ・バイクを乗り回そうと決めたんだろう」と思っている人もいるでしょうか。「ヤンキー」という言葉の意味をはっきりさせて皆さんの誤解を解いておきます。「ヤンキー」というのはアメリカ人ということです。

実際は19世紀の南北戦争のころ、南部の人が北部の人をけなす言葉として使われました。でもそれは、今回の本題ではありません。私が今この記事を書いている本当の理由は、日本の友人が言ったことが気になったからです。間違ったことだとわかっているのに、また世界中でますます評判を落とすことになるのに、アメリカ人はどうしてイラクで罪のない人々を殺し続けているのかと、友人は私に尋ねました。このごろ、ますます自分の国の行動を説明しなければならない必要を感じ、この記事を書きました。

失礼ですが、その友人の意見は二つの点で間違っています。一つめは私がアメリカのイラクでの行為を容認していると主張していることです。（決してそんなことはありません）二つめはアメリカがイラクで罪のない人々を殺しているという主張です。まず一番目の主張について述べます。アメリカ国民として私は、世界の多くの国の人々が与えられていない権利や特権を享受しています。そのことで私は、自分の祖国とこれらの権利を守るために命をささげた先人に大いに感謝しています。しかし、だからといって我が国が海外で行っているすべての行為、特に今日もなおイラクで続けている違法な行為に、私が賛同する必要はないはずです。友人が犯しているもう一つの過ちは、アメリカをひとまとめにして責め、したがってその国民が、みなイラクの殺戮（さつりく）にかかわっていると言う主張です。これは私たちが、よく犯しがちな過ちです。政府による間違った行為をその国民の行為と同一視してしまうことです。多くの場合、両者は全く異なったものです。「彼はアメリカ人だ、アメリカはイラクで戦争している、だから彼もイラクで戦争しているのだ」と言う論理は欠陥があるばかりでなく、私たちの世界に対する偏った見方を助長することにつながります。

多くのアジアの国々も今日、このような論理を使って日本人を差別しています。戦時中の残虐行為について政府が謝罪しないということを理由に、多くの日本人もこの大変微妙な問題について健忘症にかかっていると主張するのです。私はこの問題について友人や同僚と語り合いました。彼らの多くがあの混乱の時代に行われた犯罪について、もっと何かしなければならないと認めています。しかし日本の政府は、それに対して積極的ではないようです。これも国民の気持ちと政府の方針とは、一体ではないという一例です。こういった政府と国民感情とのギャップは、例えば投票という責任ある行動により、また私たちが選んだ代表者に積極的に自分たちの声を届けると言う行動によって、埋めていくことができるということを私たちはついつい忘れがちです。このように私たちが社会の中でさらに、前向きな役割を果たすことによってのみ、世界で最も影響力のある二つの国の国民として、両国の政府の大変不幸な行動を正していくことができるのです。

＊この記事は、ＡＬＴの書いた英文を訳したものです。
英語版は中央公民館にあります。

「どの子にも　目をかけ　声かけ　愛をかけて」
こどもたちを犯罪から守りましょう

学校が始まって１か月がたちました。こどもたちは新しい環境にも慣れ、落ち着きを見せ始めたことでしょう。

しかし、おとなの目の届かないところには、危険がいっぱいひそんでいます。どうかこどもたちを犯罪から守ってあげてください。

私たちは、地域の中で育ってきました。今こそ皆さんで育んでほしいのです。

近所のこどもたちに「おはよう」「こんにちは」「元気かい」「がんばってるね」「早く帰らないといけないよ」「ここは危ないよ」など声をかけてあげてください。

こどもたちがよいことをしたときには、ほめてあげてください。

■問合先　青少年センター　☎２４・３００４